説教20201025テモテ二　２：８‐１３ 　讃美歌　191　21-491　287

「言葉で生かされる」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

先週の説教で私たちは、自分が兵士、競技者、農夫のように働きなさいということを知らされました。自分はこうあるべきだ。自分たちはこのように行動すべきだ、といった話は、実は今の私たちが非常に気になっている事柄なのです。特に新型コロナウィルスがいるこの世の中にあって、私たちは、自分たちは、このように行動しなくてはならない、という自分たちの行動規範を強く求めています。

　こうして自分たちのことを深く考えていくことは、いいことですが、ただし、それだけに終わってしまっては救いはありません。自分たちのことだけを考えることは、私たちを自分たちだけの世界に押し込め、出口をなくすことでしょう。いかに理想的で、優れた考えをもってしても、それが自分たちは、という発想にとどまってしまっては、行き詰ってしまうことでしょう。

　私たちは、自分、あるいは自分たちのことを考えると同時に、あなたのことも考える必要があります。あなたのことに目を向ける必要があります。

　ですから、先週、別府不老町教会の説教を聞いた方は、ぜひ、今日の説教を聞いていただきたいと思います。

　今日の聖書箇所は、「イエス・キリストのことを思い起こしなさい。」で始まりまります。つまり、イエスキリストというあなたを思い起こしなさいといわれているのです。先週は、とうとうと自分たちのことを述べていったが、今日はいよいよあなた、イエスキリストのことをお話ししますよ、ということです。私たちに臨んでおられるイエスキリストのことを話しましょう、ということです。

　イエスキリスト、イエス様と私たちはもう少し親しくする、語弊を恐れず言えば、馴れ馴れしくする必要があるのではないでしょうか。例えば英語でイエス様を呼ぶときは「ジーザス」と呼び捨てすることもよくあります。それはもちろん敬意をこめた愛称のようなものですが、イエス様ということで、イエス様と私の間に、気を置いてしまうことになってはいいことではありません。私たちは、まことに人となって、私たちのそばに降りてきてくださったイエス様のことを、心から信頼してもよいのです。そして「イエス・キリストのことを思い起こしなさい。」といわれれば、いえすさま、わたしのそばに来てくれてありがとう、と言って彼に個人的な救いを求めてよいのです。

　しかし、イエス様はそのようにまことの人であると同時に、まことの神でもあります。この神人二性論は以前の説教の中でも申し上げましたが、まことの神、創造主でもあられるイエス様のことも、私たちはおのずと恐れをもって知らされることでしょう。

　人であって神であり、王様であって、預言者であって、祭祀でもあるイエス様、それはもうすべてであるといってもいいでしょう、聖書にもそのように書いてあります。自分たちのことだけでなく、すべてであるイエス様のことを思い起こしなさい、というのは誠に当然のことです。

　ただ、そのような大きな存在のイエス様を一挙に思い起こすことは、なかなか難しいことかもしれません。実際問題、わたくしの事柄に目が向かいがちな今の私たちが「イエス様のことを考えなさい」といわれれば、第一に身近におられる、人間イエスのことを思い起こすのではないでしょうか。親しい友人のようなイエス様、慰め主イエス様のことを思う人も多いかと思います。

　しかし、パウロが今日の聖書箇所で「イエス・キリストのことを思い起こしなさい。」と勧めている言葉に込められている意味合いは、王様としてのイエス様のほうが濃いように感ぜられます。それは次に「福音」、「ダビデ」という言葉が続いて説かれていることからも言えることです。ダビデというのはもちろんダビデ王のことですし、福音というのも神の王国の到来を意味するものだからです。

　ここで、少し福音についてご説明しておきますと、皆さん、以外に福音のことを「良い知らせ、神様からの良い知らせ」というように大まかにとらえていらっしゃらないでしょうか。それをもう少し正確に言うならば、マルコ福音書の冒頭に「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」というイエス様の言葉がありますが、これをもう少し正確に訳せば、神の王国は近づいた、この福音を信じなさい、となるのです。つまり福音ということの意味するのは、神の王国はもうすぐそばにありますよ、、ということです。

　今の社会を生きる私たちは、王様という存在を身近に感ずることができません。しかし王様というのは歴史的に見て、非常に大きな実在でした。例えば日本でもほんの１００年前の大正時代には、天皇陛下は、一人の王様と思われていたようです。そのころ国家権力と企業にたいして戦った労働者の意識にも、天皇を自分たちの保護者だとする親近感があったといわれています[[1]](#footnote-0)。

　又、先週触れたエステル記におきましても、ハマン、エステルたちにとって、ペルシャ王、クセルクセスは、彼らの存在の基盤ともなる大きな存在の人物でした。又、いうまでもなく、パウロの生きた時代は、ローマ皇帝が君臨した時でありまして、ローマ皇帝カエサルは、人々にとって生死を決する大きな実在の人物だったのです。

　それに引き換え、今の私たちは、この地上において、自分たちの王様を見出すことができないのではないでしょうか。、、それがいいとか、悪いとかを言おうとは思いませんが、とにかく、それが私たちの置かれた現状なのです。

　この世に王様がいないという現実は、私たちが王様であるイエス様の姿を思い描くことを難しくしています。パウロの時代の人たちは、実在のローマ皇帝カエサルと見比べながら王様イエスキリストを思い描いたに違いありません。

ここまでで私たちは「イエス・キリストのことを思い起こしなさい。」と勧めたパウロが意図したところと、それを受け取る私たちに、ズレがあるということをお話ししました。

パウロの時代はこの世に実際に王様がいて、それが良い王様なら世の中はパット良くなるし、逆に暴君ならば地獄の世の中がやってくる、というようなこともあったのだと思います。しかし今の私たちにはこの世の王様がいないので、王様ということ時自体イメージできなくなってるのです。ですから王様イエスキリストと言われてもピンとこないです。

ですから今日は、私たちは努めて、王様であるイエスキリストに思いをいたしながら、聖書箇所に聞いてまいりましょう。まず９節「この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません。」には、福音つまり神の王国の到来によって、犯罪人になってローマの牢獄につながれたパウロのことが記されます。パウロは、神の王国と、地上のローマ帝国との戦い、その兵士としての自分を語っています。つまり国と国との戦いです。それによって今は、彼はローマ帝国の牢獄に入れられているのです。しかし、神の言葉はつながれていない。神の言葉というのは、神ご自身であり、王様イエスキリストであり、神の王国であります。神の王国は、この世のローマ帝国の権力につながれることなどないということを、いっているのです。この世の国で犯罪人扱いされているパウロは、神の王国を思い起こし、そこでの自由にされた自分を思い起こしているのです。

生きるとはキリスト、死ぬことは利益、と公言していたパウロですから、その思い、信仰の挫折など考えられないのですが、もし仮にパウロがその信仰を捨ててしまったならば、パウロは、自他ともに、いつまでもこの世の国の囚人で終わってしまうことでしょう。しかし、パウロがそうではなくて、この世の国の牢獄を脱出して、神の王国の自由な一員に入れられたのは、ひとえに彼の信仰によるものなのです。

１０節「だから、わたしは、選ばれた人々のために、あらゆることを耐え忍んでいます。彼らもキリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るためです。」牢獄に一人入れられているパウロは決して一人ではありません。彼は選ばれた人々、つまりローマ帝国に生きるクリスチャンのことを思い起こしています。このクリスチャンたちも、又、ローマ帝国という地上の帝国内に身を置いて、パウロとともに戦う兵士たちなのです。牢獄の中で戦うパウロの姿は、一人戦うアスリート、一人労苦する農夫の姿に比せられるかもしれません。しかし、それと同時に、パウロは神の王国の兵士の一人として、多くの同志たちと共同戦線を張る戦いに臨んでいたのでした。パウロはその同志たちが、キリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るために戦いました。それはどのような戦いだったのでしょうか。それは自らの信仰を守るという戦いです。この世の囚人で終わらずに、確実に、神の王国の自由な一員に加えられるという道です。

　パウロは、まだ牢獄に入れられる前は、ローマ帝国内で人間的な知恵を用いて、福音を広めるための活動をしていたようですが、今や、牢獄に入れられた彼は、まことの救いの道の本筋である、信仰のみという一点に立ち返らせられたといってよいかもしれません。はたから見れば、いかにも孤独でみじめな姿に映る、牢獄の中のパウロは、その中身はそうではありませんでした。パウロは、神の王国の兵士の一員として、自分がこの信仰に立てば、みんなが救われる、逆に信仰を失うことは、みんなの信仰を失わせることだ、みんなが神の王国へ向かうその道を閉ざすことだと、大きな考えを抱いていたに違いありません。なぜなら彼はうそ偽りなく「生きるとはキリスト、死ぬことは利益、」とみんなに広言をしていたからです。

「彼らもキリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るためです。」神の王国の道が、私たちの一人一人の信仰によって支えられている、というのは、すごいことです。私たちの信仰が守られるのは、ある人の素晴らしい人間的な魅力や能力の力によるのではなく、私たち一人一人が持つ小さな信仰によるのです。その小さな信仰の持つ力が、最大限に発揮されたのが、今のパウロ、ローマの監獄に入れられて、鎖につながれて、周りから見れば、何の働きもできなくされている（姿の）パウロによってなのです。パウロがその信仰を守り、みんなの信仰を守り、神の王国に入れられることを確実にできたのは、「イエス・キリストを思い起こした」からにほかなりません。わたしたちみんなを守ってくれている、王様イエス様を思い起こしていたからにほかなりません。

　今日、努めて説いてきました、神の王国、そして王様であるイエス様の、今、現代におけるさきがけが、この教会であります。教会は、キリストを頭として、私たちがその部分として連なってできている一つの体です。そこでのみ言葉というのは王様イエス様からの言葉であり、私たちを神の王国の自由な一員とするために告げ知らされている、神の王国からの呼びかけそのものなのです。

お祈りします

天の父なる神よ、今日はこの兄弟姉妹たちを見前に集めてくださりともにあなたを礼拝賛美できますことに感謝します。

今日は、神の王国の先駆けであり、あなたの体である教会のことを改めて知らせてくださりありがとうございます。この王国にあって私たちはまことに生き、平和のうちに憩うことが出来ます。このことを今の国々に告げ知らせていくことが出来ますように。

今の国々が核兵器などによる争い、戦いをやめ、人々が希望をもって歩んでいくことが出来るようにしてください。

私たちは一人一人が孤立を余儀なくされる社会にいます。どうか、あなたの力によって人々を結び合わせ、人々の間にある隔ての壁を打ち砕いてください。あなたが遣わされた御子とともに私たちが戦い、働いていくことが出来ますように。

来週は、召天者記念の礼拝をおささげします。世を去った人々と、まだ世にある人々がともにあなたを見上げ、賛美する時をどうか祝福してください。まことの終わりの時まで、私たちが、あなたの愛の御手に守られて、ついに神の王国に入れられて救いを成就することが出来ますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配しておられおられます御子イエスキリストのみ名によって祈り願います。

1. 竹村民郎『大正文化　帝国のユートピア』ｐ。160 [↑](#footnote-ref-0)